

生乳受託量 最高更新 9年連続 十勝19年度122万トン

2020年4月7日

ホクレンが集計する2019年度の十勝管内の生乳受託量が、前年度比3.8%増の122万9,273トンとなり、9年連続で過去最高を更新した。規模拡大や粗飼料の質の良さから、暑さの影響を受けた夏場の一時期以外は順調に推移した。

牛乳や乳製品の原料となる生乳は道内の大半をホクレンが集荷している。道内の管内別生乳受託量は十勝がトップで、全道の約31%を占める。

全国的な離農を背景に生乳を安定的に確保する必要性が強まり、十勝では1戸当たりの規模拡大が進行。乳価の引き上げも規模拡大を促し、生乳生産が増加している。また、昨年は粗飼料の品質が良く生産量の向上に貢献、牛自体の生産能力も上がっている。

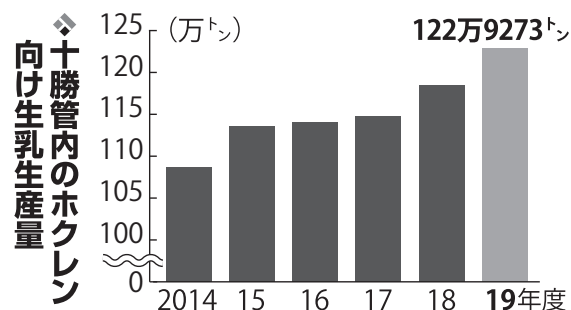
管内は多くの月で、3%前後の伸びで推移。8月は上旬の暑さにより1.8%の増加にとどまったが、9月は前年のブラックアウトの反動から8.8%の増加となった。

24JAのうち21JAで前年度超えを記録。最も生産量が多かったのはJA十勝清水町の14万4,065トン（9.4%増）で、JA上士幌町の11万9,578トン（6.3%増）、JA鹿追町の11万6,240トン（3.2%増）が続いた。

今年度は新型コロナウイルスの影響により学校給食向

け飲用乳やインバウンド需要の減少が懸念されるが、生乳生産自体は「草もデントコーンも質が良いのが好材料。引き続き堅調に推移するのでは」（ホクレン帯広支所）と見込む。

全道の生乳受託量は2.5%増の392万6,182トン。道内支所別で帯広に次ぐ2位は中標津の81万9,456トン（3.4%増）。



管内農家 45ヘクタールに拡大 戸数は1割減5,262戸 農林業センサス 1戸平均耕地

2020年12月3日

農水省は、2020年の「農林業センサス」（概数値）を公表した。平均面積を表す管内の1経営体当たりの経営耕地面積は「45.6ヘクタール」で、前回（15年）比で4ヘクタール増加した。農家戸数が減少する中、1戸当たりの経営面積の拡大が続いている点が改めて示された。十勝は全道平均（30.6ヘクタール）の1.5倍となっている。

調査は今年2月1日現在で実施。農林業の生産・就業構造を明らかにし、基礎資料を整備するため5年ごとにされている。

十勝の経営耕地の総面積は23万2,294ヘクタール（前回比1.3%減）。農産物の生産を一定規模以上で行う「農業経営体」の数は、管内5,262戸で10%減少している。経営体の減少と反比例する形で、1戸当たりの経営規模は拡大した。2000年（28.7ヘクタール）と比較すると約60%増えている。

5,262戸のうち、経営の面積別で最も多かった「30～50ヘクタール」（2,045戸）で、全体の38.9%（前回も同比率）。30ヘクタール未満が減る一方、「50～100ヘクタール」（1,226戸）が23.2%（3.1ポイント増）、「100ヘクタール以上」（217戸）も4.1%（0.8ポイント増）と増加した。

全道全体では「50～100ヘクタール」が12.7%、「100ヘクタール以上」は3.9%で、十勝の経営規模の大きさ

が際立つ。全道で最も割合が大きかったのは「5ヘクタール未満」の23.2%（十勝は8.2%）。

今回調査した十勝管内の農業経営体のうち約86%は、個人（世帯）で事業を行う「個人経営体」。高齢化や担い手不足が課題となる中、管内では省力化や生産性向上のためのスマート農業の実証事業が進められている。

<農業経営体>

農産物の生産や委託を受けて農作業を行う者を表す。「経営耕地面積が30アール以上」など生産や作業にかかる一定以上の基準に該当する者をいう。

◆十勝管内の平均耕地面積と農業経営体の推移
（農林業センサスの道内結果より）

